The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 春日懐紙とその周辺 |
| Author(s) | 伊井, 春樹 |
| Citation | 語文. 2000, 74, p. 1-11 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68961 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 春日懐紙とその周辺

伊井春樹

## 一　春日懐紙の伝来

奈良は平安京に都が移された後も独自の伝統を保持し、和歌の世界においても「南都」と冠した名の歌集が、散逸してはいるものの、数種存在していたことが知られるように、一つの歌壇を形成していた。とりわけ春日神社は藤原氏の氏神として尊崇され、興福寺、東大寺などの存在とともに、大きな文化圏をなし、和歌もさかんに生み出されていたが、その様相を示すのが春日懐紙の存在である。春日社の神官、興福寺、東大寺の僧たちの詠歌による懐紙で、その料紙の紙背が万葉集などの書写に利用されて伝来し、茶掛けなどに珍重されるとともに、今日では年代の明確な万葉集資料としても重要視される。[1] 春日大明神法楽のため、奈良在住の者たちが幾度となく歌会を催し、その歌を懐紙にしたためて奉納したのが春日懐紙であり、それを半分に折って袋綴じ本とし、紙背に万葉集を書写したのである。ただ、本来の和歌を鑑賞しようと、紙背の万葉集を削り落としたり、軸装に仕立てるため台紙に貼り付けるなどして、判読もできなくなっている懐紙も多い。そのような中にあって、万葉集を書写した年代の確実な識語が次に記すように二例存する。

寛元元年八月八日書写之　　祐定（巻六末）

寛元二年三月九日書写之　　祐定（巻二十末）

これによって、中臣祐定が寛元元年（一二四三）から翌年にかけて万葉集を全巻書写したことが明らかになり、鎌倉期の年号の入った万葉集資料として貴重な存在であるとともに、懐紙の和歌もそれ以前に詠まれたと知られてくる。『中臣氏系図』（続類従）によると、祐定は春日若宮神主祐明の次男、嘉禄二年（一二二六）に父から譲られて第四代の神主となり、康元二年（一二五七）に息男の祐賢が引き継ぐまでその職にあり、文永六年（一二六九）に七十一歳で没している。なお、改名して祐茂と称し、『祐茂百首』を春日社に奉納するとともに、勅撰集にも五首入集する歌人として知られているため、ここでは以下祐茂と呼ぶことにする。春日社に和歌懐紙が奉納されるようになった時期は明らかではないが、代々の神主のもとに集められていたはずで、祐茂はその料紙の紙背を用いて万葉集を書写したのである。現存する春日懐紙の紙背には、詞書の長短などもあるため一定しないものの、平均して万葉集が八首書写されたとすると、懐紙は五百六十枚以上は必用だったはずで、仏書や記録などにも利用されているため、その数量はさらに多くなってくる。

祐茂は懐紙の天地などを裁断し、同体裁の料紙に仕立てて万葉集を書写したのだが、その後散逸しながら春日若宮神主の千鳥家に伝

来し、[2]加賀の前田家に移されることになる。佐佐木信綱の調査によると、前田家には三十七葉が伝えられ、そのうち紙背に万葉集が書写されるのは二十一葉とされる。これ以外のルートによっても春日懐紙は伝来しており、私はこれまでのところ写真資料を含めて五十数葉を確認しているものの、百葉ばかり現存するのではないかともされるため、これだけでは不十分とはいえ、考察の大勢としてはそれほどかけ離れることはないであろう。

春日懐紙は一首懐紙から、二首、三首、さらに五首の懐紙が存し、その五首懐紙の例として次のような資料がある。

仁治第二暦仲秋南呂天陪
柿本故廟同詠五首和謌
泰俊法□

草花
しら露はくさのはごとにむすべども
はなのひもとく野辺のあきかぜ

雁
いかなればあきをちぎりてはつかりの
身にしむいろのかぜになく覧

鹿
しづのをがすそはのたゐやもるならん
みねにかさなるさおしかのこゑ

虫
きりぐ〜すなれがおもひのいかばかり
こゑきくだにもかなしかるらん

月

この懐紙の紙背は、万葉集巻六の七首が書写されているようだが、歌のほうは裁断されて第五首目の題「月」が残されるだけである。同じ題による五首懐紙は、ほかに中臣祐茂（懐紙の署名は「祐定」）、中臣祐有の例が存し、泰俊法師の懐紙によって仁治二年（一二四一）南呂（八月）の人麿法楽歌会の詠と知られ、後の二紙の端作りはいずれも「詠五首和歌」としているにすぎないため、「仁治第二云々」するのが表紙的な存在なのであろう。祐茂の懐紙の紙背は明らかではないものの、祐有の懐紙の紙背は泰俊と同じく万葉集の巻六が書写されているようで、これによって懐紙の反故紙はある程度詠作された年代順に積み重ねられ、それぞれの一まとまりごとに万葉集の書写に転用されたようである。泰俊や祐茂などの参加した人麿法楽歌会の懐紙が春日社に奉納されたものの、二年後には万葉集書写の料紙になっているわけで、大量に必用だった背景もあるのか、新旧の区別なく祐茂は自分の懐紙も含めて再利用していたと知られる。

このようにして寛元元年から二年にかけて、かなりまとまって伝来していた春日懐紙は、祐茂の手によって万葉集の書写に用いられ、この時点である程度消費してしまったはずだが、しかし一方では懐紙の奉納はその後も継続されていた。三枚見いだしている祐茂の次男祐有の懐紙のうち、一葉はすでに述べた五首懐紙で紙背は万葉集の巻六、「田家蛍火」「荒屋水鶏」「寄狂歌恋」の「詠三首和歌」は巻十九、もう一葉の「暁水鶏」の歌しか残されていない「詠三首和歌」の紙背は不明といったところである。[3]紙背に万葉集が書写されているか否かによって、懐紙歌の詠まれた時期が判明するとともに、大半は経歴未詳の詠者も、それ以前の人物であるとおおよその推測がつけられる。[4]祐有には、康元二年（一二五六）に三十七歳で父祐茂

の後を嗣いで若宮神主となった長子祐賢（一二二一～一二八二）がいるため、仮に二歳年下とすると、万葉集巻六の書写された寛元元年は二十歳となり、すでに十代の頃から歌会に出詠していたことになる。

万葉集書写後の人物となると、寛元三年生まれの祐賢の子祐春がおり、弘安五年（一二八二）に父から春日若宮神主を譲り受け、正和二年（一三一三）に子の祐臣に譲るまでその職にあり、正中元年（一三二四）に八十歳で没している。祐春には、今のところ「月前虫」「同居月」の「詠二首和歌」と、「水辺蛍」「村夕立」「絶久恋」の「詠三首和歌」との二葉の春日懐紙が知られており、前者は不明だが、後者の紙背には未詳歌集が記されており、しかも自身の筆跡とされる。するとこれなどは、祐茂が万葉集を書写したように、祐春も蓄積されていた懐紙の紙背に春日社にかかわる歌集を書写していたのであろう。これまでの伝来を知るため、『中臣氏系図』から関連する人物を摘記すると、

祐房—祐重┬祐明—**祐茂**(祐定)┬**祐賢**(祐方)—**祐春**—祐臣
　　　　　│　　　　　　　　　└**祐有**
　　　　　└祐隆—祐基

となり、このうち春日懐紙の残されている人物はゴチック体にして示した。

## 二　春日懐紙の詠者たち

春日懐紙は春日若宮の中臣氏、春日社の神主の系譜にある大中臣氏の親泰、泰清、泰道、時継、時助など、それに興福寺や東大寺の僧たちも加わった、いわば奈良在住の人々によって構成された文学圏の詠作であり、その紙背を用いて、祐茂が四十五、六歳のころに万葉集を全巻書写したのである。和歌懐紙が奉納されるようになった時期や事情は明らかではないとはいえ、祐茂によって始められ、万葉集を書写するほどの懐紙がたちどころに集積したとは考えられないため、すくなくとも詠作の残される祖父祐重あたりまではさかのぼるのではないかと思う。素俊の『楢葉和歌集』に、

文治二年九月春日若宮歌合、海辺月をよめる
朝恵法師
はりまがたしほひにあさるしらたづの
こゑもさやかにすめるつきかな（五〇七）
同じ題を　中臣祐重
よもすがらいせのはまをぎかぜさえて
月ぞすみけるあらきしまわに（五〇八）

と、「春日若宮歌合」とする文治二年（一一八六）九月に催されたという、現存しない歌合の記述があり、「海辺月」の題による朝恵と祐重の歌が示される。朝恵は興福寺の僧、勅撰集では千載集に初出、新古今集にも一首、『楢葉集』には十五首も採られる歌人であり、祐重も三首入首する。祐重から若宮神主を譲られたのは長子の祐明、三十四年間その任にあったようで、その後に万葉集を書写した祐茂が引き継ぐことになる。祐重の歌は『楢葉集』に見えるだけだが、祐明も六首採録されているにすぎなく、勅撰集や他の歌集にその名を見いだすことができない。『楢葉集』が奈良で詠まれた歌をもっぱらの対象としている性格にもよるとはいえ、それだけ中央とのつながりに乏しく、一部を除けば、大半は地方の歌壇で活躍した歌人という域を出なく、それは春日懐紙に名を留める人々にも共通してい

えることである。

右に引いた朝恵、祐重の「春日若宮歌合」の歌に続いて、

寿永元年同社歌合に　　中臣祐明

あまくだるみかげうつりしかがみかと
みゆるみかさの山のはの月（五〇九）

が配列されており、これによると寿永元年（一一八二）にも春日若宮で歌合があり、祐明も出詠していたことが知られる。ただ、祐明以外にどのような歌人たちが参加していたのか、彼が広く歌人として活躍していなかっただけに、これも奈良在住の人々の参加した歌合だったのであろう。もう一人、祐明弟の祐隆も、『楢葉集』に三首収載されるだけで、ほかに彼の歌を見いだせないのは、歌人として活躍していたわけではなく、奈良という地での歌会に出詠していたにすぎないからであろう。そのうちの一首に、

故郷鶉といへる事をよめる　　中臣祐隆

我がやどはねやのうちまで野となりて
あるじあらそふうづらなくなり（六〇五）

と、「故郷鶉」の歌があり、祐隆以前では『忠度集』の、

河原院にて、故郷鶉といふことを、人人よみ侍りしに

しほがまのむかしのあとはあれはてて
あさぢが原にうづらなくなり（三六）

とする一首が存するだけである。祐隆が自ら案出したというのではなく、春日若宮社を中心としたささやかな歌会などで与えられた題だったに違いなく、それなりに新しい歌題が工夫され、祐隆も伊勢物語のイメージを背景にし、「野とならば鶉となりて鳴きをらむ」の歌ことばを応用して詠んだのであろう。このような例を見ると、都を中心とする歌壇からすれば、一地方の奈良歌壇とはいえ、歌題の創出に新機軸を求め、古典の読解にも怠らなかった様相がほのみえるようでもある。

中臣家における、祐茂以前の人物と和歌を見ていくと、いずれも作品を残しているとはいえ、入集するのは『楢葉集』に限られており、これはいわば奈良という地方での歌集にすぎないだけに、歌人としての世間的な実力の評価となると、かなり割り引いて考える必用もあるであろう。その問題はともかくとして、春日懐紙の現存するのは祐茂以降ではあるとはいえ、歌合にも出詠している祖父祐重あたりからすでに奉納されていたに違いなく、数代にわたる営みにより、料紙も万葉集を書写するだけの分量にも達していたはずである。勿論、年代の明らかではない東大寺や興福寺の僧たち、大中臣家の人物などもいるため、春日懐紙の出現はそれ以前にさかのぼるかも知れないが、今のところ知り得る資料は残されていない。

春日懐紙は奈良在住の歌人を中心とした作品であったとはいえ、外部から参加した者もいたに違いなく、その一人とみなされるのが西行の懐紙[5]で、それには、

詠　三首和歌

円位

雨中卯花

あめそゝくうのはなかげのぬれごろも
なみのしたゆくこゝちこそすれ

郭公聞杜

ひとこゑにかへらんものかほとゝぎす
はる〳〵きぬるころもでのもり

月前増恋

をのづからおもひたへたるよひのまも

月ゆへそでのまたしほれぬる

とあり、解説によると周防毛利家旧蔵、内箱の書き付けには「西行法師三首懐紙」と了伴による極めが貼付されるという。さらに箱には各種の極札や添状が納められ、古筆家初代の了佐以来西行と判断されていたようだが、筆跡の考証により西行ではありえなく、少し時代は下り、西行とは別人の円位であろうとし、さらに中臣祐有と木工権助泰道の同題歌の存することから春日懐紙の一葉と認定する。

「円位」と自署する春日懐紙からは、右のように判断して処理することもできるのだが、ほかにも「田村家蔵品展観図録」（大阪、昭和十一年十一月）には、西行筆の春日懐紙として、

田家蛍火

やゝあきはちかづきにけりおやまだの

いはもあらはにほたるとびつゝ

忘屋水鶏

あはれとやよるのくひなのたゝく覧

あれたるやどのまきのいたどを

寄狂歌恋

ふるきつかのきつねがましききみなれや

こう〳〵とてはにげりくれぬる

建久三のとし八月中納言殿許にてのりきよかき侍る

とする一葉の図版を見いだす。端作りのないのは、写真の掲載上カットされたのか、すでに裁断されていたのか明らかではないが、同題はほかに縁清、経詮、明算、祐有の四枚を見いだし、いずれも紙背には万葉集が書写されているため、春日懐紙であるのは確かである。ただここで問題になるのは、後筆による末尾の書き入れで、建久三年（一一九二）八月に中納言のもとでの「のりきよ」の筆だとする。この年の中納言は、藤原定能、源通親、藤原親信、権中納言には藤原経房、同泰通、平親宗、藤原隆房、同兼光、源通資などいるため特定できないのと、八月に何か歌会が催されたのか、そのあたりも明らかではない。春日懐紙が中納言邸で書写されたというのも解せないし、「のりきよ」というのが西行の俗名であるにしても、彼は二年前の建久元年二月に没しているため、本来的にこの懐紙と結びつけることはできない。

春日懐紙の末尾に、後人がさかしらに「のりきよ」と記したため、古筆家が西行の筆跡として極めも付してしまったと、一応の筋道は考えられるものの、別に円位の懐紙が存在するのを知ったとなると、両者はまったく無関係ではありえなくなってくる。それに「のりきよ」とあるからといって出家以前とは限らず、西行は憲清法師とも称していたし、治承四年（一一八〇）から同五年ころの自筆とされる「一品経懐紙」では「円位」と自署する。祐明が寿永元年の若宮社歌合に出詠し、地元の歌人として活躍していたように、このころ春日社での歌会で懐紙が奉納されていたとなると、西行の参加も年代的には可能になってくる。ただ、祐有にも「田家蛍火」の歌が存するとなると、西行とは時間的に重ならないため、同じ歌題で二度詠作されたと考えざるを得なくなってくる。それにしても、「円位」の懐紙が西行自筆ではないとすると、なぜことさら転写までして春日懐紙の一葉に加えていたのか、また筆者についての注記の見られるのは、今のところ「田村家蔵品展観図録」所収だけだが、末尾の

余白に書き加えたのは何らかの伝承があったからに違いなく、それだけ珍重されて襲蔵されていたためなのか、興味深い存在とはいえ、これ以上の推測は困難といえよう。

## 三　南都歌壇と春日懐紙

『楢葉集』の跋文によると、文暦二年（嘉禎元年、一二三五）九月十日に催された月次の歌会の後、披講を終えて宴となり、その席でかつて師光が春日に住んでいたころ、[6]『南都集』を編纂し、その後『山階集』『山階後集』『拾遺南都集』があいついだようで、それを継承することが話題になったという。これらはいずれも散逸している歌集だが、新たに企てられたのは、「ここに寛喜のすゑ、当寺の人人ふるきあとをたづねて、五十首歌をよみて、春日社にたてまつりしよりこのかた、月日のうた、所所の詠、およびよよのあをによしならの集にもれたるもの」と、寛喜三年（一二三一）の春日社奉納五十首歌以降を撰歌の対象としたとし、素俊が一千余首をまとめて『楢葉集』としたのは嘉禎二年（一二三六）六月五日であるとするのにより、比較的近年の歌が中心になっていたと知られる。『楢葉集』に収載された五十首和歌は、

寛喜三年のころ、ならの人人春日社に五十首歌たてまつりけるに、春鳥といへる事を
禅遍法師
めぐりこむほどは雲井の秋風を
月にちぎりてかへるかりがね（巻一春、三六）

寛喜三年、春日社にたてまつりける五十首の歌の中に、冬風
法橋章信
吹きおくるあとよりうづむこのはかな
かへらば風もみちやたどらむ（巻四冬、二九〇）

などとあり、残された九首から判断すると四季恋雑の五十首だったようで、しかも作者は春日懐紙の禅遍や素俊を含む、跋文に「当寺の人人」とするようにすべてが僧の出詠であった。月次の歌会の例でも、

堀河院百首を題にて月なみの歌よみけるに、子日をよめる
命円法師
はるのいろのふたしほみゆるひめこ松
こぞの子の日にたれのこしけむ（巻一春、九）

社頭の宿所にて、やしろのつかさ、月次の歌よみ侍りけるに、寄寒草恋の心を
中臣裕定
人ぞうき嵐はをぎのかれはまで
なれにし秋のつゆをとふなり（巻五恋上、四一九）

と、これは僧俗を交えた一四首を見いだし、奈良で催された活発な歌会の様相が知られてくる。祐隆の歌に伊勢物語の背景を読みとったが、右の命円は「堀河院百首」を題とし、素俊は好忠の「三百六十首の歌」を模し（四一八）、「在中将のかきつばた」（瞻上、六六九）「千載集み侍りけるに」（素俊、八八五）「楽府段段の心を題にて」（定宗、九〇七）「反古のうらに三代集かきたりけるをみて」（卜部兼直、九一九）などと、『楢葉集』には古典の世界とのかかわりが見てとれる。そのほか、

源氏の心をさぐりて恋の歌をよみ侍りけるに、よもぎふを

えて

賢祥法師

みちもなくしげきよもぎにおくつゆの
たまさか□こそ人もとひしか（巻六恋下、四八八）

不退寺にて、源氏の名によせて、人人、恋の心をよみけるに

法橋章信

みをつくしなみだのかはにたてずとも
ふかき思ひの色はみゆらむ（同、四八九）

源氏物語のきりつぼのまきの、なほあさまつりごともおこたりぬべかめり、とあるところ

円覚法師

みしゆめをやみのうつつにたどりつつ
なほおきまよふ秋のあさ露（巻十二雑三、九〇八）

と、業平の建立したと伝える不退寺で詠作した源氏物語の巻名歌も存するなど、積極的に古典を和歌の世界に取り込もうとする営みも見られる。

月次などの歌会は奈良各所の寺院で開かれていたようで、不退寺のほかにも、「花蔵院」「浄名院」「生蓮院」「法隆寺の蓮光院」「理趣院」「修南院」「東南院」「一乗院」「興西院」「角院」「西方院」「慈林院」「薬師寺鎮守八幡」などと、詞書からはさまざまな名称を拾い出すことができる。そういった中にあってもっとも多いのは光明院のようで、「光明院にて雁をよめる」（二一〇）「光明院にて、人人十首の歌よみ侍りけるに」（二六一）「光明院の月次歌よみて遣しける」（五九七）「むつきの上の弓はりのころ、光明院の人人、春未深といふ事を当座にてよみ侍りけるに」（七五一）と、人々はしばしばここに集まって歌会を催しており、その名は一六回にものぼり、しかも中心となっていたのは僧たちで、それ以外ではわずかに、

光明院にて、法花経の料紙の歌とてすすめ侍りけるに、はつ秋の心をよめる

中臣祐定

けふよりは秋のはつかぜたついちの
うるまのしみづ人もすさめず（巻十一雑二、八〇八）

と、祐定の歌一首を見るにすぎない。それはともかく、このようにして奈良在住の僧俗による歌会などの詠作が春日懐紙として奉納され、その一部が今日に伝えられることになったのである。これまで確認した作者を示すと（懐紙に記された自署名と、数字は私の確認した懐紙の枚数を示す）、

大炊助時継　一　大中臣泰清　三
※春日神主親泰　一　木工権助（泰道）　一
主殿時助　一　※若宮神主中臣祐定　二
中臣祐基　二　※兵庫助中臣祐方　三
中臣祐有　三　※若宮神主祐春　二
栄算　一　縁清　一　※縁西　一　縁弁　一
学乗　二　※学詮　二　※堯縁　一　経詮　一
憲真　一　実印　一　※実眼　一　※信芸　一
静阿　一　西行　一　聖什　一　※禅遍　一
※素俊　一　※仍実　一　泰俊　一　※珍暹　一
明算　三　命実　一　明真　一　※頼縁　一
※良胤　一　了覚　一　亮承　一　札経　一

といったところで、『楢葉集』を含む何らかの歌集に名を見いだす人物には頭に※の符号を付した。さらこのうち、親泰（『楢葉集』所収歌数二首、以下同）、縁西（二首）、学詮（一首）、堯縁（一首）、実眼（二首）、信芸（六首）、禅遍（八首）、仍実（八首）、珍暹（四首）、頼縁（二首）、良胤（八首）は、『楢葉集』以外には登場しないという状況にある。例外は素俊で、勅撰集歌人として知られるだけではなく、花下十念房の名を持つ連歌師、「素俊法師久我前内大臣に琵琶さづけける」（楢葉集九一二）とされる楽人、「素俊法師が秀句の事」（古今著聞集）と評される漢詩人と、奈良在住ながら多方面の活躍をした風流人であり、すでに言及したように、彼の手によって編纂されたのが『楢葉集』であった。このように見てくると、大中臣家や中臣家の神官たちもそうなのだが、とりわけ『楢葉集』にも入集しなかった栄算以下の僧たちは、今日では春日懐紙の存在が歌を詠作したあかしの唯一の資料ということになる。

春日社を中心としながらも、各寺院での持ち回りによる月次や五十首歌会、歌合などがしばしば催され、歌が大量に生み出されたはずで、そのような背景のもとに『南都集』以下も成立していったわけで、ここには栄算などの僧の歌も採録されていたに違いない。そのような奈良の地での和歌隆盛を支えたのは、神官の祐定であり、僧の素俊だったのであろう。ただ、どのような折に春日社に懐紙が奉納されたのか、歌会のたびごとに奉納されたとは考えられなく、現存する春日懐紙の歌と『楢葉集』とが一首も重ならないため、成立の背景は今のところ知りようがない。

## 四　春日懐紙の歌題

春日懐紙には同一の歌題による懐紙が複数存するのによって、歌会の参加者はそれぞれ与えられた題のもとに詠作していたようだが、出題とか添削は誰がしたのか、「大僧都経円、さまざまのはなの歌かれこれによませ侍りけるに、さかりにこのほふはなといふ事を」（三九）とか、「律師増弁、法隆寺の蓮光院にて、人人に百首歌すすめ侍りけるによめる」（一一二）「法印覚遍、人人に鳥十首の歌よませ侍りけるに」（七九六）などといった例を見ると、それぞれ心得のある僧たちが果たしていたようにも推察できる。とりわけ歌題は工夫が凝らされており、すでに指摘したように古典とのかかわりとともに、一字題や二字題はともかく、それ以外は前代にも用例が少なかったり、また独創的な題も多数見ることができる。良胤の「詠三首和歌」の「山家落花」の場合、検索できるのは、

山家落花といへる心をよみ侍りける　前大納言俊実

花のみなちりてののちぞ山ざとの
はらはぬ庭はみるべかりける（千載集、一〇一）

の一首にすぎなく、同題の和歌はほかに見あたらない。縁弁の「舟中郭公」にしても、

舟中郭公　源仲正

まつらぶね梶とりまはしこぎめぐり
たまつ島わにほととぎすなく（夫木抄、二九二八）

舟中郭公　俊頼朝臣

おひ風にもどるもたゆし時鳥
いざ高砂の松の梢に（和歌一字抄、三八）

の二首があるだけで、後代になって、

舟中郭公

ほととぎす鳴きいづる山のふもと行く
ふねにおちくる声きこゆなり（拾玉集、三二九一）

とする慈円の一首を見いだす程度である。

これらの例からしても、安易に前代や同時代の歌題を利用するのではなく、かなり新味のある詠作にする努力をしていた背景が浮かび上がってくるようで、仍実の「夕鷹狩」などは『宗良親王千首』と『亀山殿七百首』の西園寺公雄詠との二首が取り出せるものの、いずれも春日懐紙よりも後の成立である。以下このような春日懐紙特有の歌題を列挙すると、「待春恋」「浦寒月」「隔海恋」「惜残恋」「春草漸萌」「草鶯起竹」「山有余寒」「見花忘帰」「花飛似雪」「雨中卯花」「郭公聞杜」「田家蛍火」「山家残暑」「山家聞嵐」「于野見月」「向泉待友」「月前増恋」「寄狂歌恋」「寄才暮恋」といった例が指摘できる。また、「夏月似雪」は『和歌一字抄』に良暹の作が、「野亭冬月」も『範宗集』に一例を見いだすだけという、きわめて限られた使用の状況にあり、いずれにしても春日懐紙の歌題が珍しい点では変わりない。

さらに「河辺款冬」の題を持つ歌を調べると、

河辺款冬

つなでなはこころしてひけたかせぶね
きしのやまぶきにほふさかりぞ（雅兼集一四）

河辺款冬　　同（鎌倉右大臣）

山ぶきの花の雫に袖ぬれて
むかしおぼゆる玉川のさと（夫木和歌抄二〇四七）

河辺款冬　　法橋□□

やま吹のかげはこのせもうつりけり
いづこをふまむるでの玉河（楢葉集九五）

と三首を見いだし、雅兼、実朝はいずれも『楢葉集』以前、後の両者は古今集の「井出の玉川」と「山吹」を用いているとはいえ、影響のもとに詠まれた作ではなさそうである。法橋某は特定できないものの、奈良在住の僧に違いなく、このように類例の少ない歌題を詠んでいるのは、歌会での作品にほかならなく、伝統的な歌ことばを用いる方法は、春日懐紙や『楢葉集』の和歌の世界に通じるであろう。同題の春日懐紙の歌は、「詠三首和歌」[8]とする良胤の、

ぬれつゝもなをわたりこむやまぶきの
なみにうつろふるでのたまがは

の歌で、水に映る山吹の花、その井出の玉川を渡ろうとする情景は、法橋某と内容的に重なりを示す。

現存する春日懐紙の歌は、『楢葉集』に一首も採歌されていないが、ことさら避けているわけではなく、歌数が少ないだけにたまたま一致しないだけで、本来は共通する歌も存在したはずである。この春日懐紙の「河辺款冬」などは、歌題そのものもそれほど流布していたわけではなく、しかも『楢葉集』の歌とはきわめて近似しているのは、同じく懐紙として奉納されていた一首が採られたのではないだろうか。

「詠三首和歌」として「舟中郭公」「故郷五月雨」「近隣恋」の三首を持つ春日懐紙には、縁弁、学詮、祐方の三葉が存するが、このうち「故郷五月雨」によるもっとも古い歌は、

新大納言家庚申会に、故郷五月雨

かぜわたるのきのしのぶのさみだれに
ふるさと人の袖はぬれつつ（光経集四六八）

のようで、詠作時期は不明ながら、光経の出家した嘉禄以前と思われるため、『楢葉集』の成立する十年ばかり前となる。その後に続くのが『楢葉集』の、

故郷五月雨の心をよめる　　実元法師
すみすててあれにし里のさみだれに
ねやともいはずおつるたまみづ（雑二、七九九）

があり、もう一首は『続門葉』収載だが、これは時代的に問題にならない。このようにきわめて珍しい歌題ながら、春日懐紙と『楢葉集』所収歌とが重なるというのは、宗元法師の歌も本来は懐紙に記されて奉納されていた可能性が強い。

さきほど伝西行の「のりきよ」筆とする三首懐紙の存在を指摘したが、実はここに示された三首の歌題はいずれも過去に類例がなく、例外として「亡屋水鶏」が『祐茂百首』に、

亡屋水鶏
人すまぬさととともしらで夜もすがら
あけよとたたくくひなるらん（二六）

として見いだすことができるだけである。『祐茂百首』の成立は『楢葉集』より後であり、しかも「所労平癒のため春日社に奉納したと推定される百首」（『和歌大辞典』）だけに、他の人々と懐紙を奉納するような歌会の折の詠作ではなかった。同題の春日懐紙は五葉現存するが、ここに祐茂も加わっていたに違いなく、後になって百首歌を奉納する企てをした際、かつて用いた歌題を彼は再利用することにしたのであろう。

また、春日懐紙の歌が『楢葉集』に一首も採られていなのは、現存する資料の少なさに起因しており、歌題の重なりによっても知られるように、素俊は奉納された懐紙も撰集の資料として用いていたはずである。祐茂が懐紙の紙背に万葉集を書写したのはその後になってのことだが、春日社への和歌懐紙の奉納はさらに継続され、その紙背も他の作品の書写に利用されていた。祐春の「水辺蛍」「村夕立」「絶久恋」の三首懐紙の紙背には、祐春の筆跡によって、

照念院入道前関白太政大臣
みかさ山みればかすめるみねつゞき
みどり色なふまつぞなみたつ　　前大僧正聖□

あづさゆみはるの山辺にを□□□□
まづたなびくはかすみなりけり
あしたの鴬といふ心をよみ侍け□　　前大僧正聖□

かすみしくたにのあさとのあけたてば
おりはへきなく鴬のこゑ
野若菜といふ心を　　読人不知

風さむみなをてでさへてとぶ火野に
□きのたえ〳〵わかなつむなり
春草を　　前大納言為氏

今よりはみどりしられでか□□□□
雪まのくさのしたにもえつ□
五十首の哥のなかに　藤原仲人

もえいづる草はみながらいろめきて

かすめるかたやむさしのゝはら
若草

と記されており、照念院入道は鷹司兼平、聖某は春日懐紙も存する東大寺の僧聖什であろうか、藤原仲人は不明、配列された歌からすると春の部のようだが、何の歌集だったのか明らかではない。歌集だとすると、これ一葉だけのはずはなく、祐春は全巻の書写をしていたに違いなく、しかも春日懐紙を用いているのは、奈良の地で編纂された撰集の可能性もあろう。春日懐紙の内容とともに、奈良における歌壇の広がりの一端をここでは考察した。

注

(1) 『校本萬葉集（新増補版）』（一九八一年、岩波書店）

(2) 「墨美」第一九七号（昭和四十五年一月）の永島福太郎「春日懐紙」による。なお、この号は春日懐紙の特集号となっており、三十七葉の写真版とともに翻字も付される。

(3) なお歌題は、堯縁の懐紙の存在によって「暁水鶏」「籬瞿麦」「惜残恋」の三首であったことが知られる。

(4) ただ、春日懐紙が珍重されるにともない、裏写りをなくするために書写されていた万葉集を削り落としたり、また軸装に仕立てた結果、判読ができなくなった例も多い。

(5) 古筆学研究所編『過眼墨宝撰集』3（一九八八年八月、旺文社）

(6) 井上宗雄『平安後期歌人伝の研究』（昭和五三年、笠間書院）では、師光の奈良在住を文治四（一一八九）、五年か、あるいは建久期（一一九〇～一一九八）を仮として想定する。なお、『楢葉集』の本文及びその考察は、樋口芳麻呂『楢葉和歌集と研究』（昭和三六年、未刊国文資料刊行会）、『新編国歌大観』（第六巻）による。南都歌壇については、中村文氏の「鎌倉初期南都歌壇に関する二、三の考察」（「中世文学」第三四号、平成元年五月）、同「定範と東南院歌会――鎌倉初期南都歌壇の一考察――」（「立教大学日本文学」第六三号、平成元年一二月）があり、とりわけ前者において、法脈や師弟関係等を契機にして成立したのではなく、「和歌を好む僧が年臈を積み地位を獲得して、自由に宰領できる自房・院家等の場を持」ち、そこに同好の年少の僧達が集まって成立したと考察する。

(7) 『楢葉集』には、「在中将のたて侍りける不退寺といふ所に、法橋章信、くさのいほりむすびてすみ侍りければ、人のつねにまかりて歌よみ連歌などしてあそび侍りけるに」（巻一春、六四、専寂）とする詞書により、源氏物語の巻名歌も章信が催したのであろう。なお、『楢葉集』には不退寺での詠作が七首収められる。

(8) 良胤の懐紙は、「山家落花」「河辺歓冬」「契不来恋」の三首からなる。

〈付記〉 春日懐紙については、各種の図版や目録類を利用したほか、園田女子大学図書館蔵の明算による「詠三首和歌」（山家残暑、草花未遍、隔海恋）の懐紙は、福嶋昭治氏の資料の提供による。なお、同題にはほかに祐茂、祐賢、学乗の懐紙が知られる。

――本学教授――